

歴史コーナー常設展示 ―古文書をよむ―

古文書が語る加藤正方 ②

江戸時代のはじめ、加藤清正・忠広の家老および八代城主として活躍した加藤正方。この展示では、正方の子孫の家に伝来した古文書を中心に、波乱万丈な人生をご紹介します。八代城下町を拓いた男の晩年はどのようなものだったのでしょうか？

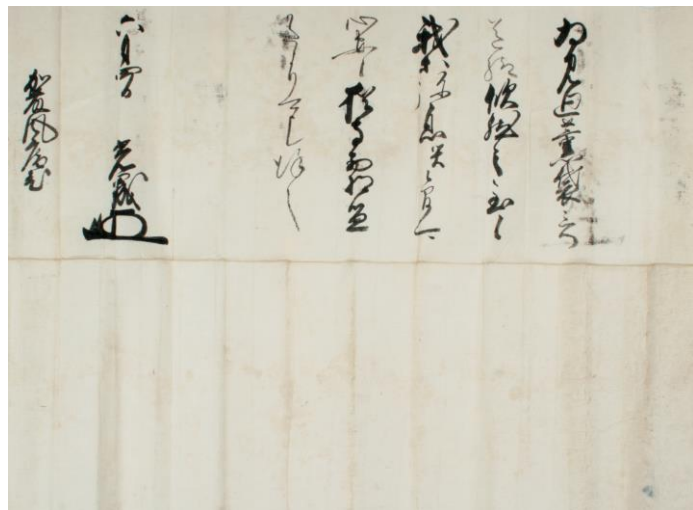
元八代城主、広島浅野家へ

1 浅野光晟書状

江戸時代前期（17世紀） 当館蔵（広島加藤家資料）

正保元年（1644）8月、幕府は有力牢人の京都追放を命じ、幕府要人との交流を咎められた元八代城主の加藤正方は広島の大名家浅野家に預けられます。

これは浅野家2代藩主・浅野光晟（1617-1693）の書状です。これより前に、正方（風庵）が光晟へ「薫袋三つ」を贈っていたようで、そのことに対する御礼状となっています。光晟は正方をとて厚遇しており、この書状も両者の交友を示すものとして貴重な資料です。



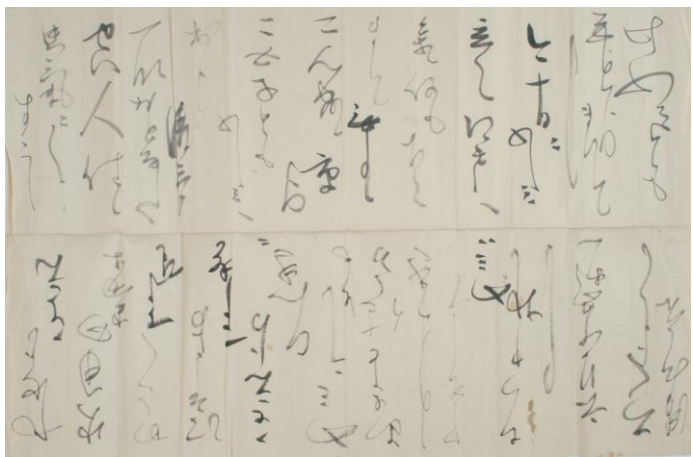
旅先から留守を気にかける正方

2 加藤風庵(正方)自筆書状

正保4年（1647） 当館蔵（広島加藤家資料）

加藤正方は京都での牢人時代に自身の孫の清九郎を養子にして、広島に同伴しました

この書状は正保4年（1647）6月、江戸に向かった正方が伏見から出した手紙で、広島で留守を守っている清九郎に宛てて「火用心・番所かたく」守るように伝えています。旅先から留守を守る養子を気にかける正方の姿がうかがえます。



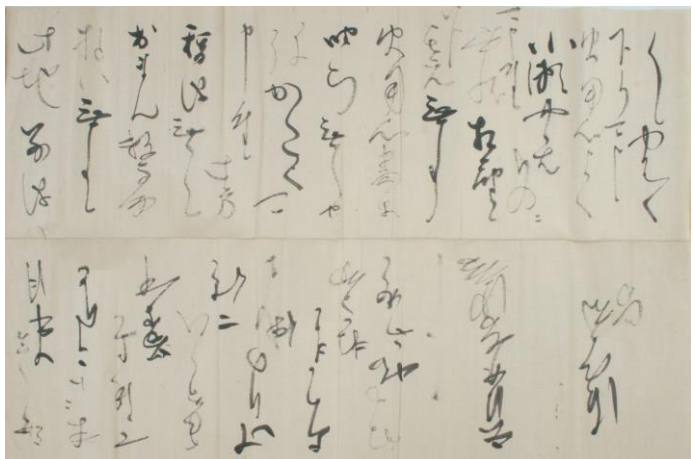
晩年の正方、江戸で孫に会う

3 加藤風庵(正方)自筆書状

正保4年（1647） 当館蔵（広島加藤家資料）

2の手紙を出した後、江戸に到着した正方が、広島で留守番をしている清九郎に宛てた手紙です。この中で、孫の「数馬介」に会ったことを述べており、江戸に赴いた目的の一つが孫に会うことであったことがわかります。

この時、正方68歳。晩年の正方は、自身の死後を心配し、清九郎や孫のことを気にかけていたようです。

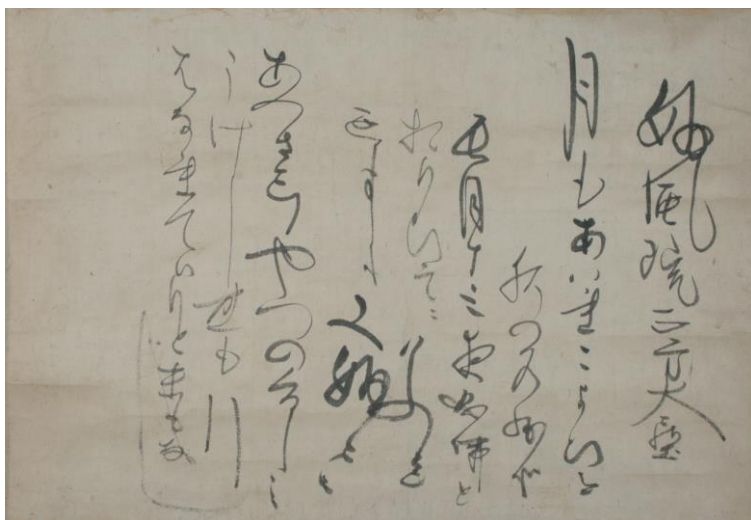


69 歳加藤正方、広島で没

4 加藤正方自筆辞世

慶安元年（1648） 当館蔵（広島加藤家資料）

加藤正方は慶安元年（1648）9月23日、69歳で亡くなります。これは亡くなる数日前に正方が自ら書いた辞世の句と和歌です。死の直前に書いたとは思えない、活き活きとした筆づかいが印象的です。宛名がありませんが、子孫である広島加藤家に伝来したもののなので、養子・清九郎に宛てたものと考えられます。

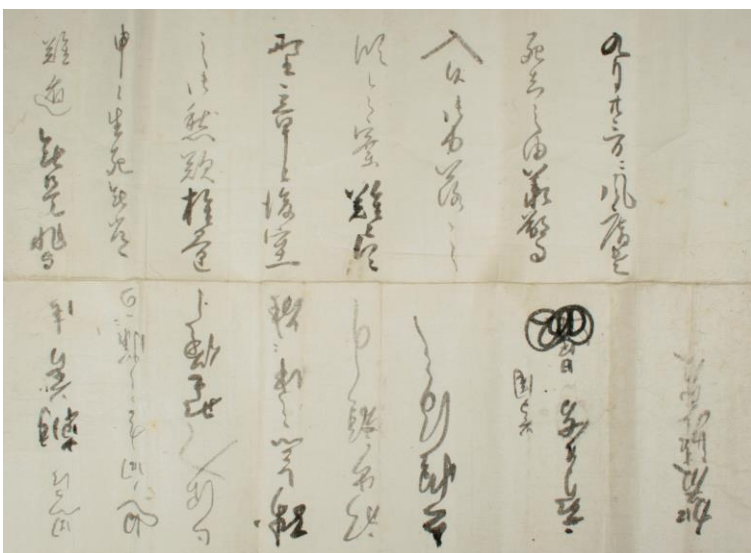


養子・清九郎に宛てたお悔やみ状

5 本圀寺日運書状

慶安元年（1648） 当館蔵（広島加藤家資料）

慶安元年（1648）9月に正方が没したことに対して、京都六条本圀寺の十八世日運が正方の養子清九郎に宛てたお悔み状です。「後室の御愁歎」と、広島に残された正方の妻に対してもお見舞いの言葉が述べられています。本圀寺は寛永9年（1632）から正保元年（1644）まで正方が隠棲した大寺院です。



養子清九郎、浅野家に仕官

6 浅野光晟知行宛行状

万治2年（1659） 当館蔵（広島加藤家資料）

正方が没した翌年の慶安2年（1649）、幕府は養子清九郎の家督相続を認め、慶安3年（1650）、清九郎は浅野光晟に500石で正式に召抱えられました。この宛行状は、万治2年（1659）に改めて清九郎に発給された知行宛行状です。これ以降、清九郎の子孫は幕末まで広島浅野家に仕官し続け、正方の遺品が大切に伝えられたのです。

